

---

# 山手線殺人ゲーム

今郷麟

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

山手線殺人ゲーム

### 【Nコード】

N0034F

### 【作者名】

今郷麟

### 【あらすじ】

大阪からの旅行者、智恵は品川駅からいつものように山手線に乗り込んだ。しかし、そこは“いつもの”山手線ではなかった。彼女の前で殺人が繰り返される。閉鎖された空間の中で生きて外に出ることができのだろうか!?

## 第1話：品川駅（前書き）

古今東西く山手線ゲームく

今回のお題は『殺人の方法』

チャンチャン「絞殺」

チャンチャン「刺殺」

チャンチャン「撲殺」

チャンチャン「銃殺」

……あなたはどの殺され方がお好みですか？

## 第1話：品川駅

1

品川駅は今日も乗降の人々でごった返していた。

京急の急行がプラットフォームに滑り込んでくる。

風間智恵はわりかし小さめのキャスターバッグを転がしながら、列車を降りてきた。

キャスターが列車のドア受けに引っかかったり、出入り口とホームのちよつとした段差なんかお構いなしでゴロゴロと転がしている。

JRとの連絡通路近くで一度脇に避け、人氣が引くのを待った。

彼女はそこでやつと一息ついたという感じで大きく伸びをした。

「やっぱ、新幹線で来ればよかったわ〜」

智恵はいかにも大阪の女の子といったイントネーションでひとりごちた。

普段は天下茶屋駅から地下鉄を乗り継いで新大阪駅まで行き、新幹線で東京まで出てくる彼女であったが、今回は飛行機での行脚だったため、かなり往生した。

いつもだったら、自転車で行く難波までも天下茶屋から地下鉄に乗り、そこから連絡バスで伊丹の大阪空港まで行った。

電車とモノレールを乗り継いでというのも考えたが、荷物のおかげで一番連絡の少ないこのコースにした。

今日は久々に彼氏である正人に逢えるとあって、乗り継ぎの苦労も大したものではなかった。今回の飛行機の往復のチケットも正人が送ったものだった。

智恵は財布から羽田空港から京急品川駅までの切符と関西圏のICカードであるICOCAを取り出した。

京急の切符を自動改札に滑り込ませ、ICOCAを認証盤にかざした。

ピピピピピピ……

智恵の目の前で自動改札の前の板が素早く閉まった。

自動改札の表示板に使用不可の類の文字が液晶に表れた。

「なんやねん。ICOCA、東京でも使える言うとつたやんか」

智恵はまた、ひとりごちた。

自動改札の先からさつき投入した切符が出ている。それを手に取り、彼女は連絡用の券売機へと向かった。

ICOCAは確かに東京圏内のJRでも使用ができるのだが、残念ながら私鉄や地下鉄からの連絡で使用することができない。ICOCAを東京圏内のJRで使用するためには、一度私鉄の改札から出て、あらためてJRの改札口に入らなければならない。

品川駅のような大きな駅の場合、これはかなり骨が折れる。

特に智恵のように旅行者よろしく、大きな荷物を持っているときは特にである。

改札脇の駅員にその事を聞いたため、智恵はぶつぶつ文句を言いながらも連絡切符を購入したのだった。

智恵が手に取ったそれが真っ赤な切符であることはその時の彼女は何も気に止めなかった。

あとでこのことが大いなる後悔になることなど、この時の彼女には全く考えることなどできなかつた。

しかし、その連絡切符を吸い込んだ自動改札は、大阪からの旅行者を喜んで出迎える。

智恵は連絡口を抜けるとキャスターバッグを手に持ち、数段ある階段を下りた。

天井が高い品川駅のコンコースは縦横無尽に乗降客が各々の目的の場所へ向かう。この駅は始発から最終まで眠ることがない。

二〇〇三年九月に東海道新幹線の駅が開業したことによって、品川駅は今までも増して乗降客が増え、よりマンモス駅へとなった。

特に陽が南天を下り、アンバーな光が新品川プリンスホテルを照らし出すこの時間は通学の学生たちも多く、雑多な雰囲気により濃く醸し出されていた。

智恵は手に抱えたキャリーバッグを置くと肩に掛けたセカンドバッグから携帯電話を取り出した。

二つ折りの電話を開き、リダイヤルから『正人』の欄を選んで、電話を掛けた。

トウルル……

受話器の先から呼び出し音が鳴っている。

何度かのコールで呼び出し先の電話は自動的に留守番電話へと切り替わってしまった。

「いいへんのか……三ヶ月ぶりに逢えるつてのに正人の奴、どこ行つてんねん」

智恵はひとつ舌打ちをすると正人のメールに『品川駅に着いたよ』という短いコメントを怒りの絵文字付きで送った。

これから日暮里経由で京成電鉄に乗り換え、堀切菖蒲園まで行く予定だ。

本来、羽田空港を起点としているため、青砥駅経由で堀切菖蒲園に行くのがベストなのだろうが、智恵は普段新幹線で東京に行くことが多いため、山手線で行く方が慣れていた。

智恵は携帯電話を閉じると一番乗り場の階段からプラットフォームへと下りた。

ちようどホームから内回りの山手線が出て行っているのが見える。  
「うわぁ」

大阪生まれ大阪育ちの彼女は絶句した。

列車を降りた人の波が階段にあふれてきた。智恵はその波を避けるように階段の端に避けた。

こんなことなら遠回りしてもエスカレーターにしておけば良かったと思うのだが、如何せん東京と大阪ではエスカレーターの流儀が違うのも大阪育ちの彼女にとって足を遠ざける要因のひとつにだった。

毎回事のことだが、東京の乗降客の混みようには閉口する。

確かに大阪の環状線も乗降客は負けてない自身があるが、なぜか

東京の駅の方が混んでいるように見えて仕方がなかった。

階段を下りた知恵は、キャスターバッグを転がし、人が比較的少ない場所へと移動した。

さつき列車が出て行っただばかりなのに、ホームは既に人でごった返している。

知恵は適当な場所で列の後ろに並んだ。

彼女のすぐ後ろには、二番ホームに入ってくる山手線外回りの乗客の背中が当たりそうな距離にある。

ピロリロ

知恵が一息吐く間もなく、構内に電子音が流れた。ありふれたメロディの電子音だ。

続いて別の電子音が重なるようになった。

それに続くアナウンスも重なって聞こえてくる。

するとホームの両脇からアルミニウムの鈍い光沢に鮮やかな黄緑色の太い線が施された金属の塊が人の波を掻き分けるように滑り込んでくる。

ほぼ同時に停車したそれは自らの身体の中から吐き出すように乗客が降りてくる。

ホームは瞬く間にひとつの人の塊のようになったが、間もなく、今までホームで待っていた人たちがその金属の塊の中に吸い込まれていった。

知恵もその列にならって内回りの山手線の中へと足を踏み入れた。この時、彼女はまさかこの後に想像を絶することに巻き込まれるとは微塵にも思っていなかった。

電子音とともにドアが閉まり、その鈍い光沢を放った金属の棺桶は黄昏の中、次の目的地へと進んでいくのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0034f/>

---

山手線殺人ゲーム

2010年10月14日19時41分発行